# “文楽”に挑む。
# ―古典芸能とアートのコラボレーション―

人間国宝の桐竹勘十郎さんに、昨年が「文楽座」が誕生してちょうど150年であると教えていただいた。

太夫が三味線にのせて浄瑠璃を語り、人形遣いが人形を操る芸能が“文楽”だが、明治5(1872)年に三代目植村文楽軒が松島新地(西区)に建てた劇場が「文楽座」であり、その劇場名の“文楽”が人形浄瑠璃全体を指す代名詞となったわけである。この話を、昨年、難波のホテルロイヤルクラシック大阪で開催された企画展「ニューCLASSIC～アートの魅力 時をつなぐ、時を超えて」のオープニングで、勘十郎さんにうかがった。

ホテルロイヤルクラシック大阪は、村野藤吾が設計した新歌舞伎座(現在は上本町に移転)を建て替えるにあたって、村野をリスペクトする建築家の隈研吾さんが、旧・新歌舞伎座の外観や意匠を保存した形で設計し、2019年12月に開業した。“ホテル&ミュージアム”をコンセプトとするホテル館内には、たくさんの現代美術作品が展示されているが、今回、ホテルの広間をギャラリーにし、私の監修で「ニューCLASSIC」が開かれた。

大阪の芸能に深く関わった新歌舞伎座である。展覧会をするならば、大阪ゆかりの芸能にちなんだ企画がよい。オープニングは、切り絵作家・杉江みどりさんの個展であり、つづけて版画家・木村光佑さんに出品いただいた。

杉江みどり《お初・徳兵衛―曽根崎心中―》

杉江さんは、女子美術大学で油彩画を専攻され、文楽の登場人物や名場面を切り絵で表現される。画面は端正で「曽根崎心中」のお初徳兵衛も、きりっとした輪郭線でまとめられながら、切り抜かれた紙がうねうねとして情感が盛り上がり、太棹三味線の響きのようで心地よい。

木村さんは、シルクスクリーンの版画技法で知られる作家で、国際版画賞を数多く受賞し、京都工芸繊維大学の学長もつとめられた。浮遊するような現代社会の感覚を、ポップな色彩とコラージュで表現し、1970年代の阪急梅田駅や南海難波駅の周辺にあったモニュメントを記憶している。

「ニューCLASSIC～アートの魅力」展は、お二人の個展からはじまり、今年1月には4人の新進アーチストの個展が開かれた(すでに終了)。この展覧会オープニングでの勘十郎さんを囲んだトークのなかで「文楽座」150年の話になったのである。そしてトークの聴衆から、“文楽”は世界的に評価されているが、肝心の地元の大阪人が知らないのはどうしたことか、どうすれば大阪で“文楽”は盛りあがるのか? という質問が出た。

展覧会場にて。杉江みどりさん

学生時代に大阪人としてのアイデンティティを知りたくて、私は“文楽”公演に足を運ぶようになったが、勘十郎さんは、年少からの文楽体験を重視され、大阪市立高津小学校(文楽劇場は同小学校の旧地に建つ)の6年生を対象に、こどもたちが“文楽”を上演する指導をされている。さらに、大阪中之島美術館で、アーチストの森村泰昌さんを人形として操り、人間浄瑠璃「新・鏡影綺譚」を上演されるなど(ダイジェスト版がYouTubeで視聴できる)、現代に“文楽”を広めるために獅子奮迅のご活躍である。

ふと思ったのがアーチストの活動も重要だが、市民や行政、企業の側も、大阪の街をよくするために“文楽”を積極的に取り込むことができないかということである。

たとえば文楽劇場の最寄り駅「日本橋」の名を「日本橋国立文楽劇場前」にするのはどうだろうか。路線図を開くと「文楽劇場」の名が自然と目に飛び込むし、文化都市大阪のイメージアップになる。2019年に大阪大学に近い阪急宝塚線「石橋」駅が「石橋阪大前」、大阪モノレールの「柴原」が「柴原阪大前」に改名した。阪神電車の岩屋駅も2011年から副駅名として「兵庫県立美術館前」が用いられ、京阪電車にも「龍谷大前深草」駅がある。

関係者間の調整は難しいだろうが、技芸員の皆さんが純粋に芸に打ち込めるよう、万博開催を前に、知恵をめぐらし応援できることはもっとあるはずである。

筆者プロフィール

**橋爪 節也** はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館教授(前館長)、大阪大学人文学研究科(兼任)。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』(創元社)など。